
だが断る！

七乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だが断る！

【Nコード】

N08660

【作者名】

七乃

【あらすじ】

死んだと思えば生きていて。

だけれど結局死んでいて。

それでも俺は生きてたくて。

そうして選んだ選択肢。

無理難題を押しつけられて、気付けば知らない世界の果て。

ファンタジーが蔓延る世界で無力な俺にどうしろと。

そんなこんなでサクッと始まる第二の人生。

世界を救え？

だが断る！

序章／ホワイトアウト（前書き）

わーにんぐ！

この作品は、作者の愛と友情と希望が詰まっているような詰まっていないような、とにかくノリと勢いと気合いだけで構成されています。

つまり、プロットがない！

ちゃんとした作品しか興味がないぜってな読者はゴーホームプリーズ。

俺はどんな文章でも全然いけるぜっ、ってな方は稚拙ながらもお楽しみ頂けると幸いです。

……前書きって何を書けばいいのやら。

序章／ホワイトアウト

そこは、真っ白なセカイだった。

前後左右。それこそ上から下まで360度余すことなく――ええもう清々しいくらいに真っ白な空間がそこには広がっていた。

あんまり白ばかりで遠近感すら狂ってくる、というか現実的にありえないだろこれ、と云ってしまいうるくらいにホワイトアウトした世界。

えっと、なんぞこれ。

誰か、とりあえず状況を説明して下さい。

「貴公も突然のことで驚きを禁じ得ないであろう。ここは我が順を追って説明致そう」

「っ!?!」

背後から声がして慌てて振り返る。

するとそこには、先程までは微塵も気配を感じさせない……感じさせない……

その……

「凄い……筋肉です」

「ふむ。この筋肉に目を付けるとは、良い目をしておるの」

うん、まあ、なんだ。

変態だった。

いや、筋肉か。

ああもう、この際どっちでもいいや。

とにかくそこにいたのは、一言で言えば筋肉怪人というか、正に筋肉達磨というか。

多分ボディービルダーだったら眉唾物なくらいに完璧な筋肉の塊だった。

うん、控えめに言っても気持ち悪いです、はい。

「えーっと、その、どちらさまでしようか？」

「我輩は――神である！」

「……ああ、はい。神様ですかー、なるほどー」

つまり危ない人ですね、なんて作り笑顔を浮かべながら秒速で結論付ける俺のブレインは絶対に間違いじゃないと思う。

塞翁が馬。大体にして自分で自分のことを神様なんて（しかも自信満々で）云う奴にはろくな奴がないというのは俺の偏見だろうか。

実際「君にこの世界からサヨナラして貰うためにきたの」とか云って異世界に誘拐していく神様も、何処かにいたいような、いないような。

それはともかく。

「で、その神様が俺に何のご用でしょうか？」

極力目の前の筋肉を直視しないように微妙に視線を外しながら用件を聞いてみる。

個人的には何の用もあって欲しくないのだが。

「う、うむ。些か云いにくいことなのだが――」

じゃあ云わなくていいよ、と咄嗟に云わなかった俺は偉いと思う。
誰か褒めてー、なんて脳内の片隅で一人漫才を繰り広げている、
と。

「――貴公は既に死んでおるのだ」

なにその世紀末格闘漫画的な台詞は。

ここは「ひでぶっ」とでも云えばいいのか。

……。

……………?

ていうか待て。待て待て?

今、完全にツッコミモードに入ってて流しかけたが――何だと?

「……え、死んでる?」

「うむ。死んでおる」

ぽくぽくぽくぽく、ちーん。

人差し指でこめかみをノックしながら思考を回転させ、さくつと
結論を出す。

「イミフ」

三文字で余裕だった。

――じゃなくて。

「は? え、なに、どゆこと? 俺、死んだの?」

「うむ。死んでおる」

大仰に頷く筋肉、もとい神。

いや、そこは頷くなと云いたい。否定してくれ。
じゃなくて、違う。

えっと、あれ。

くそ、そうじゃない。

なんでだ、云いたいことがまとまらない。

「……俺、本当に、死んでるのか」

「うむ、死んでおる」

三度目の宣言に、足下が急激に崩れ落ちるような感覚を覚える。

なにやってんだ、俺。

なんでこんなに動揺してる。

こんなの否定すればいい。

死んでるなら、今こうしている俺は何なんだって、否定すれば良いだけの話だ。

それなのに、どうしてそんな気になれない。

まるで、俺自身が死んだことに納得しているような――

「――あ、ぐ――」

刹那。

脳裏を過ぎる、光景。

知らない少女。

立っていた。道路の真ん中。

鳴り響くクラクション。咄嗟に走り出す。妙にゆっくりに感じる世界。

手を伸ばす。少女に触れる。驚いたような表情。勢いを殺さずに少女を押し出す。

歩道に倒れ込む少女。それを視界に収める。安堵が胸を過ぎる。不意に横から気配を感じて――

「――っ、あ、っ」

思い、出した。

俺、死んだ。

間違いなく、死んだ。

記憶が、あふれ出す。

衝突した瞬間の記憶が。

全身の骨が衝撃に負けて折れていく感覚を。肉が裂け、内臓が破裂し、何もかもが砕けて壊れ――

「止めよ」

シャットダウン。

それまで感じていた何もかもが、強制的に切り取られる錯覚。だけど全身に走る悪寒だけは拭ってはくれなかった。

がたがた、と。自分で自分を抱きしめるようにしながら、ありもしない寒さに震える。

「すまぬ。我輩が浅薄であった。許して欲しい」

……は、はは。

神様の台詞じゃないね、それ。

だけど、ちょっとだけ気が楽になった、ような気がした。

……。

……よし、大丈夫。

「えっと、すみません。取り乱しました」

「いや、こちらこそ、すまぬ」

そう云って俺に深々と頭を下げる姿は、どう見ても神様って感じじゃない。

少し笑える。

「……それで、改めて聞きますけど。神様が俺に何のようなんですか？」

自分の死に対して不思議と——ある意味、異常なくらいに落ち着いて向き合いながら（といっても死んだ瞬間だけは思い出さないようにしながら、だが）、俺はこの自称神様に問いかける。

俺は死んだ。

それは、いい。

よくはないけど、今は考えても仕方ない。

問題は、さっきも一瞬浮かんだけど、それなら今ここにいる俺は何だってんだ、ってことだ。

しばらく逡巡するように黙り込んでいた神様だったが、意を決したのか鋭い眼光で俺を直視しながら口を開いた。

「貴公に頼み事をしたいのだ」

「神様の台詞じゃないですね」

反射的にツツコミを入れてから、僅かに口元を緩める。
少しだが調子が戻ってきたのを自覚したからだ。

「神様は何でも出来る、つてのが俺のイメージだったんですがね」
「ふむ。何でもは出来んよ。我輩に出来るのは、我輩に出来ること
だけだ」

神様万能説、全否定。

いやまあ、どうでもいいけど。

「……それで、その頼み事ってのは？」

「うむ。それは――」

後になって、思う。

俺はこのとき、もう少し深く考えるべきだった、と。

勿論、既に死んでいる身としては多少考えたところで選択肢が増えるわけではなかったのだけれど、それでも考えるのを止めるべきではなかったと思う。

考えていれば、もう少しくらいは心構えが出来ていたと思うから。だけどもあ、少なくともこのときの俺はそんなに先のことは考えていなかった。

自分が死んだという事実が微妙に影響を与えていたことは否定でき
ない。

ただ、この時の即断即決が後々どういう風に俺に影響を与えるかを、俺はもう少し考えるべきだった。

いやもう、本当に今更ですけどね。

「――世界を、救って欲しい」

「だが断る」

序章／ホワイトアウト（後書き）

ちなみにこれ、作者にとっては人生初の投稿、ある意味で実験小説。色々試行錯誤中なので、まあ、あまり期待はなさらずにラフに考えて下さい。

プロットも書いてないしね！ 氏ね！

まあ、ある程度軌道に乗ってきたら考えようかなあ、ってのは未完成情况フラグですかそうですか。

ああもう、後書きも何を書けばいいのやら。

ああ。そういや微妙に他の作者の方の作品をオマってるんだけど、これはセーフですか。それともアウトですか。

……アウトっぽいよなあ。

やっぱ許可だけは取らないと駄目だよなあ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0866o/>

だが断る！

2010年10月8日14時41分発行